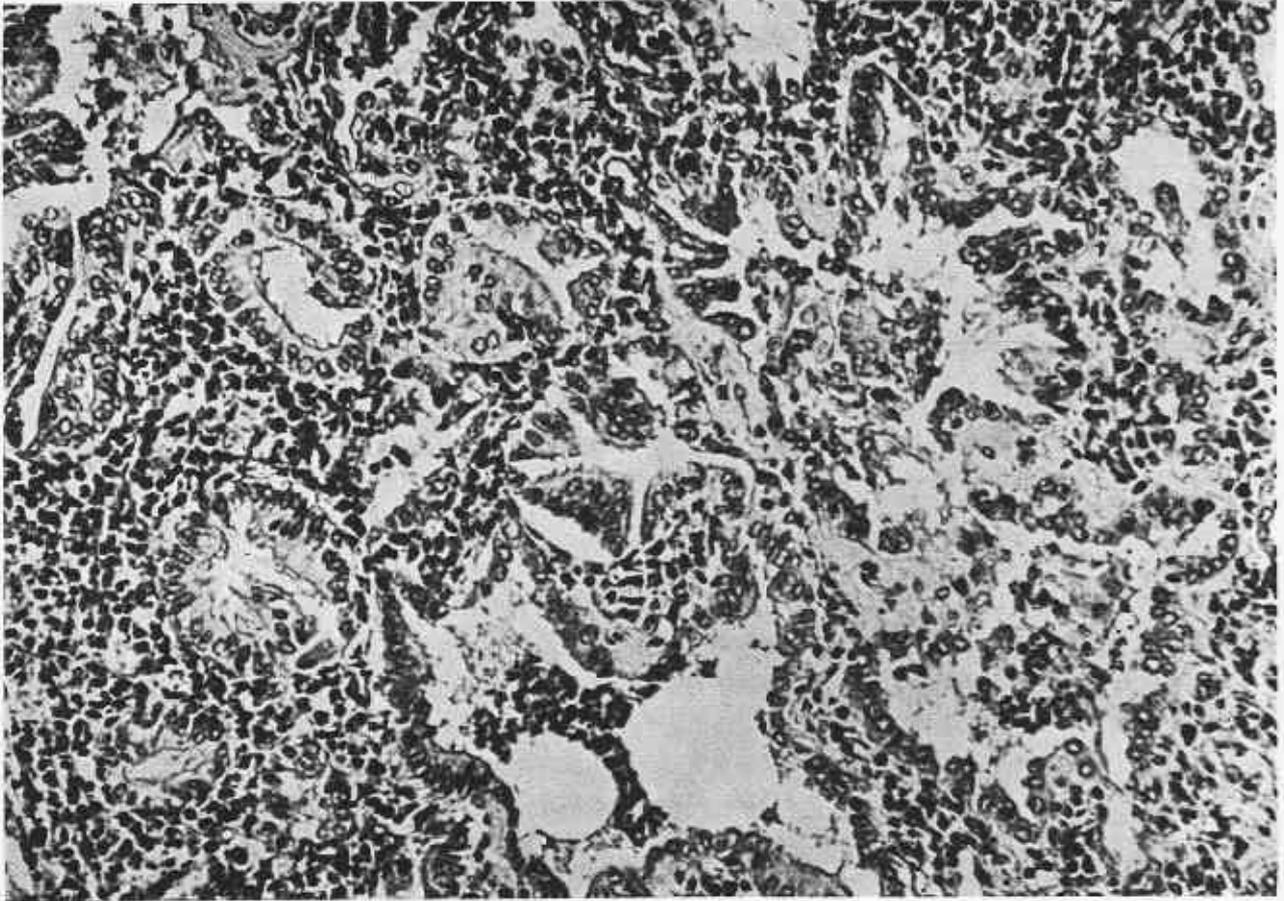


牛の肺癌(気管支上皮腺癌)

農林省家畜衛生試験場中国支場出題・第3回獣医病理学研修会標本 No. 37



黒毛和牛，9才，♀，兵庫県城崎郡産。8才の昭和36年秋から次第に瘦削し，翌37年春から発咳を認め，次第に悪化して同年9月に予後不良で殺処分した。経過は約1年と思われる。剖検上，肺を除く主要臓器には著変はない。肺には左右とも辺縁部に接して兎頭大ないし手拳大灰黄色の腫瘤が散在していた。腫瘤は境界明瞭，質密実，軽い刀抵抗を有し，かつ弾力性を欠く。肺の正常部は少ない。

鏡下では，肺胞は単層ないし2・3層の長桿状淡明核円柱上皮性細胞よりなり，かつ複合腺様構造を示している。細気管支粘膜との移行連絡もある。また，腫瘍化した上皮性細胞は淡明な円形核細胞となり，肺胞内に集塊を形成し，肺胞中隔小孔を通して相互に連絡している。この細胞集塊にはミトーゼを認める。また，強度に線維化した肺胞隔の単層上皮性細胞は，核濃縮，PAS顆粒富有，好酸性細胞質で若干変つている。間質は，肺胞隔小葉間および胸膜下において結合織の増生が認められ

る。これら間質には，リンパ球，形質細胞などのびまん性浸潤があり，肺胞，気管支腔，腺様構造内腔には好中球滲出がある。嗜銀性線維は増殖上皮性細胞基底部に増加しているが，上皮性細胞塊内には走行を認め難い。なお転移像は追究できなかつた。

以上の所見より，本例は牛の肺癌(気管支上皮腺癌)と診断した。

スミスおよびジョーズ(Smith & Jones)は，「気管支上皮腺癌は，牛を含む家畜6種で20例の報告があり，そのうち牛は15例」と記している。しかしわが国では著者の知る範囲では牛における症例報告には未だ接しない。牛をはじめとし，他の家畜での本症発生に深い関心が持たれる。単純な肺炎として看過されるもののなかに肺癌がありはしないだろうか。近時人体肺癌は増加傾向を辿り，その発癌因子の論議も活発であるが，家畜肺癌の検討は比較病理学上興味ある問題と考える。

(乾 純夫)